

能《野宮》の舞台、野宮神社は京都市の西北、嵯峨野にあります。私はここ十年以上前から毎年元旦に初詣に行っています。お参りしはじめたころは、人も少なくひっそりとしていましたが、年々人気が高まってきたようで、ついに今年は雪の降る中、山陰線の線路まで続く長蛇の列に並んでお参りの順番を待ちました。

不思議なのは、ここが縁結びの神様として有名なことです。野宮といえば、『源氏物語』において光源氏と六条御息所の悲しい別れの舞台となったところ。結ばれる縁とはどうもイメージが結びつきません。もっとも、六条御息所は実在の人物ではありません。野宮神社自体が悲しい別れの舞台になったわけではありませんから、そこをお参りして良縁を得たからといって、六条さんの恨みをかうことはないでしょう。でも十年続けてお参りしているわりにいつこうに良縁に恵まれない私はやはり六条御息所にたたられているのでしょうか。そうだとっても六条さんのファンである私にとつては光栄なことです。と、いうよりもこうして魅力的な能《野宮》について考えさせていただけの縁を得たことこそ野宮神社のおかげと感謝しております。

一身の置き所もあはれ昔の——私にとつてもっとも好きな能の一つである《野宮》の一番印象的な詞章がこれです。『源氏物語』の世界をもとに緻密な文飾を酷使して作られた詞章ですから、なかなか意味をとるのも大変ですが、ここではシテ六条御息所が懐旧の舞を待った後、露同様のはかない身を置いたのもここ、そしてここは今も昔と変わらない、ということが述べられています。「身の置き所も、あはれ」と続くことによつて「身の置き所の、なさ」を暗示する言葉となつているように私には思えます。結んではすぐ消える露のような「身の置き所のなさ」これは、《野宮》に通底する重要な要素となつていると私は思うのです。

《野宮》が世阿弥作の夢幻能の名作《井筒》ととてもよく似た構造を持つていることは指摘されています。そのうえで観世寿夫氏は両曲の「次第」のイメージを「じつと動かずにいる姿とへめぐり動いて行く姿」と分析され、それがそれぞれ曲の曲の特色につながっている、と演技者の立場から《井筒》と《野宮》の違いをすくなく描いておられます。（観世寿夫著『心より心に伝ふる花』白水社刊より）

私も《井筒》と《野宮》は似ているけれどもそれだけに、そ

の違いが余計際立つ曲であると感じます。そしてその違いに、それぞれの曲の魅力を感じるのです。

ひとつのところにとどまれないシテ。このイメージは全曲を通して貫かれています。毎年、九月七日に現れるところは、野宮、場所自体は変わらないのですが、シテ六条御息所的心は常に動いています。九月七日は旧暦ですから、現在でいうと秋のなかば、七日の月は夜が更けるにしたがい西山へと沈んでゆきます。木の間の月、「飽きる」に通じる秋、光源氏の愛も秋の花もすべては移ろうもの。思い出の野宮に帰つてきてしまった御息所は、

身に沁む色の消えかへり、思へばいにしへを何としのぶの草衣。きてしもあらぬ飯の世に、行き帰るこそ恨みなれ。行き帰るこそ恨みなれ。

と謡います。消えそうでもまた結ぶ露、諦めきれない思い、来てもしかたがない飯の世、すなわち現世に、行つてはまた帰るを繰り返してしまふ。「消えかへり」「行き帰る」この対句こそ《野宮》全体をつらぬくキーワードのように思えます。御息所のまさに居場所のないたたまれなさ。このいたたまれなさは、かの「車争い」を思い出させます。私ははじめ『源氏物語』の「賢木の巻」を下敷きにし、嵯峨野の野宮を舞台とする能《野宮》において、違う巻のできごとで、賀茂の祭を舞台とする「車争い」の場面が挿入されていることに少し違和感を覚えていました。でもシテ御息所の「いたたまれなさ」が重要な要素であることを思えば、シテの思い出の中に

この場面が現れることは、とても自然なことであると言わざるをえません。

祭見物の際、時めく源氏の正妻葵上の車に押しやられてしまふ、しかし、身分の高い御息所はだまつて押しやられるような立場にはありません。「身は小車の遣るかたもなし」どうしようもなく押しやられてしまったけれど、本当は引き下がりがたくもない、どうすればよいか途方にくれていたのです。

野宮での別れにしても、訪れも間遠になった光源氏に対して、みずからいさぎよく身を引いて伊勢に下向したようにみえて、最後まで御息所の気持ちは揺れ動いていたとみるのが妥当でしょう。

身はなほうしの小車の、廻り廻り来ていつまでぞ、妄執を晴らし給へや

と謡い御息所は舞いを舞います。車が廻り続けるように、身をどこへもとどまらせることができない、どうか妄執を晴らしてください、と僧に頼みます。

一方《井筒》のシテは、どうでしょうか。思い出の場所に現れ、昔を語り、舞を舞う。その構造はたしかに《野宮》とそっくりです。しかし、井筒の女の迷いはそこで見ている僧に妄執を晴らしてもらいたい、というものではないようです。思い出がなつかしいあまりに、戻つてきてしまうのですが、業平の衣を来て水鏡にその姿をうつし、なつかしむ姿にはどこか満足を感じられるようにも思います。その満足は、夢が覚める

ように消え果てる無常なものではありませんが、シテは僧にその妄執を晴らしてほしいとは言っていないし、僧もただ夢を見ただけです。

《井筒》のクライマックスは、シテが井筒を覗き込み、その姿を水鏡にうつすところです。井戸の底に自分とも業平ともつかない姿が映っている、そしてそれをはるか上空の月が照らしています。そこにはいわば垂直方向の力が働いています。あくまでも、その場所にとどまる思い。「見ればなつかしや」、なつかしいその場所に戻ってきてしまう、という深い思いがあります。

しかし御息所はそこにとどまっていられないのです。毎年、思い出の場所に現れてしまうところは井筒の女と同じです。野の宮の跡、すなわち思い出の場所がなつかしい、というのと同じです。しかし、

ここはもとより忝なくも、神風や伊勢の、内外の鳥居に出で入る姿は生死の道を、神は享けずや思ふらんと。また車にうち乗りて、火宅の門をや出でぬらん。

火宅の門を。

鳥居の外に出るのか入るのか、まさに出で入るその迷う場面が本曲のクライマックスとなっています。その行つては戻る水平方向の運動こそ、いたたまれなさ、という曲全体に通低するイメージを象徴していると私は思うのです。そしてまた御息所は、車に乗らないといけません。そして迷いから抜け出せたのかどうか、わからないまま曲は終わります。そこ

にとどまったまま、夜が明ける《井筒》とは違うのです。どうしてもそこにはいられないのです。

思えば野宮は伊勢へ下向する前に二年だけいる仮の宿。いつまでもいられるところではありません。そして、秋も終り、花も枯れ枯れになります。なにことも移ろう、移ろう季節の美しさは、世阿弥もその能楽論の中で四季折節に咲く花は散るゆえにめずらしく面白いと言っているとおり、日本のそして京都の重要な美意識であるといえます。六条御息所のいたたまれなさは、そのようなあまりにも美しい秋の嵯峨野の風景とともに描かれることによつて、一層その思いが際立つて感じられるのです。

こうしてみると《野宮》がいかにも《井筒》と違うかがわかります。しかし違いは優劣ではありません。《井筒》の深い思いは見るものの心にも深い思いを降ろしますが、《野宮》のシテ六条御息所のいたたまれなさ、出で入る姿は、観客それぞれの心に思い当たるものとしてひびくのではないのでしょうか。

大好きな能《野宮》について私の勝手な感想を書いてしまいました。正しい見方ではないかもしれませんが、もちろん能はご覧になる方々ひとりひとりが、それぞれの思いを心にきざまれるものです。私もまた、違う発見をするかもしれません。

また今日も《野宮》で自分の心の御息所に出会える、楽しみでなりません。

さみどりの野宮竹の境界ボーダーに六条御息所の実在